

弘前大学教職大学院 News Letter

創刊号

2017. 6. 9



研究科長メッセージ 「教員養成の最強チームを目指して」

今年の4月、青森県教育委員会の連携協力を礎に本学教育学研究科に教職大学院である教職実践専攻を開設することができました。第1期生として、現職教員院生8名、学部卒院生10名の計18名を迎え、16名の専任教員と教育学研究科をはじめ学内の5研究科3研究所の兼任教員とともに、オール弘前大学体制で教職大学院の新たな歴史を拓きました。

本学では、教職大学院設置の理念である「理論」と「実践」の往還による教育課題解決力のブラッシュアップを、大学院生と教職員スタッフが一つのチームになって実現可能にします。院生個々のキャリアのバックグラウンド、そして教育課題設定は異なるものの、豊富な実務経験を有する教員や最先端の実践研究に取り組む教員が、あるときはコーチとなり、また、あるときはベテラン選手となり、中堅選手である現職教員院生やルーキーである学部卒院生とともに、日夜、教育課題の解決に向け切磋琢磨しています。その姿は、あたかも教員養成の最強チームを目指す姿に例える事ができましょう。

これからの学校教育は、学校内はもちろんのこと、地域の方々の連携を含めたチームとしての機能が重要視されます。本教職大学院では、それぞれの組織における各世代のリーダーとして活躍できる人材を育成します。皆さんも、是非、われわれのチームに加わりませんか。岩木山の麓、素晴らしいフィールドを準備してお待ちしております。

弘前大学大学院教育学研究科研究科長 戸塚 学



開設の目的

青森県が直面している教育課題に対して、理論と実践との往還・融合を通じた省察をもとに、学校内外の専門家と協働しながら、その解決に向けた教育実践を創造しリードしていく教員を養成します。

設置コース・養成する教員像

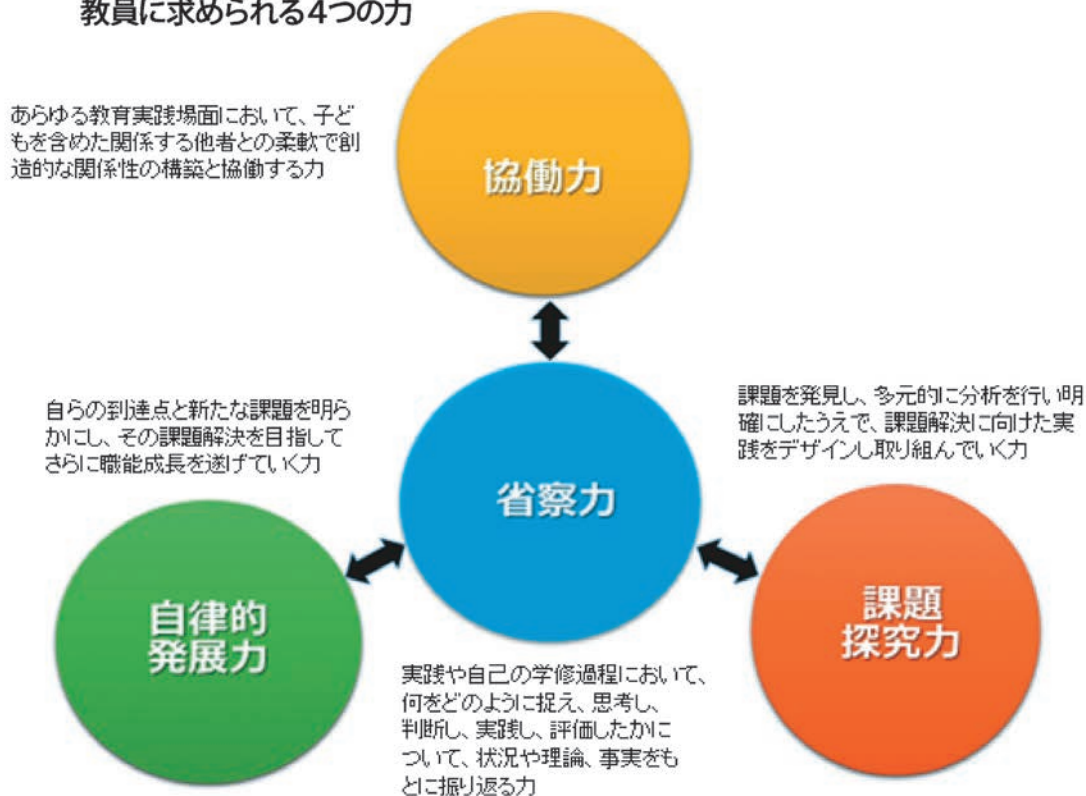
コース	受験対象	教員像
ミドルリーダー養成コース	原則として青森県教育委員会が派遣予定の公立学校教員	校内研修、地域連携、教材開発などの課題に、他者と共に創造的に取り組むうえで中心となるミドルリーダー
教育実践開発コース	4年制大学を卒業もしくは3月末までに卒業見込みで、教員免許状を取得もしくは3月末までに取得見込みの者	教育課題に対応するための理論と事実に基づいた確かな実践力・省察力を持つ若手教員

いま、教員に求められる4つの力

いま、教員には、自らの到達点と課題を明らかにし、その課題の解決に取り組み、職能成長を遂げていくための**自律的発展力**が求められます。また、学校・社会状況が直面している教育的課題に対して、真の課題を明らかにし、解決を試みる課題探究力が重要であり、その際、理論的支えを持った根拠に基づき実践を行い、そこでの子どもの実態を踏まえて成長と課題を明らかにしていく**省察力**が求められます。また、課題探究や省察を多面的なものとするために、それらを教員集団として行っていく**協働力**が必要です。

これら4つの力（自律的発展力、課題探究力、省察力、協働力）の育成を教職大学院では目指しています。そのため、このNews Letterの表題も「4つの力」としました。

教員に求められる4つの力



教職大学院教員の紹介



専攻長 研究者教員 中野博之

約3年間、青森県教委及び弘前市教委の皆様にご協力を頂きながら、教職大学院の設置のために働いて参りましたので、開校を迎えることができ感慨無量です。「大学院は勉強をする所ではなく研究をする所」と言います。教員は各院生の研究が深まっていくように情報を提供したり環境を整えたりすることしかできません。情報を繋ぎ研究として深めていくのは院生の皆さん自身です。院生の皆さんは、よき教師、そして、学校でのよきリーダーとなるための努力を惜しまないでください。最後になりましたが、平成28年3月まで設置準備にご尽力頂きました、元弘前高校校長の矢本嘉則先生、元教育学部教員の花屋道子先生に心から御礼を申し上げます。



副専攻長 総務部会長 実務家教員 瀧本 壽史

昨年度赴任し、教職大学院開設準備にあたってきた実務家教員です。学校現場（高校）の他、県教育庁や知事部局、博物館も経験してきました。専門は日本史で主に教科領域指導研究を担当しています。開設準備中、沢山の方々の期待の大きさと思いの深さを感じてきました。教員の養成・採用・研修のいずれにも関わる教育内容であり、今後教職大学院の役割はますます重要になってくると思います。その中の一員としての責任と、一期生とともに学んでいけることの喜びを感じています。一期生諸君にはこれからの国や県の教育を担っていくのだという気概を持って、日々の研究に取り組んで欲しいと思っています。

**副専攻長 実習部会長 実務家教員 三戸延聖**

「大切な今を繋ぐこと」

第12代弘前大学長の遠藤正彦先生が『弘前大学で見つけた107の言の葉ノート』（弘前大学出版会）に次の言葉を寄せています。山登りで「夏道が落葉に覆われると、進む道を見失います。敷き詰められた落ち葉は、どこも道に見えます。心は焦ります。こんな時いつも私は、『今が大切』『今が大切』と、何度も口にして心を静めるのです。そして考え、一旦決めた方向を、後は振り返らずにひたすら進みます。」と。この場に集った者同士がそれぞれの大切な今を繋ぎ合うことで、教職大学院が単なる研修の場にとどまらず、地域や校種の壁を超えて新たな道が拓かれていくのだと確信しています。よろしくお祈りします。

**教務部会長 研究者教員 上野秀人**

「自覚と希望」

学校への期待・教員への期待の高まりは、我々教育に携わる者それぞれが責任を持ち応えていかなければなりません。私もまた地域社会の課題を改めて教育課題と認識しつつ、各学校と弘前大学との接点にいる自覚とともに課題解決に向けた研究と教育に努めたいと思います。あと数年で70周年を迎える弘前大学にあって、新たな一歩となる教職大学院に関わることは挑戦です。具体的な担当科目は、教科領域研究、教育課程の開発、健康教育等です。大学院生の皆さん、共に、可能性を内に外にひろげましょう。

**入試フォローアップ部会長 研究者教員 小林央美**

教職大学院がスタートして約2ヶ月。「わくわく、どきどき」しながら、新しい発見や思考の深まりを感じる日々で、とても楽しいです。それは、なぜなのか？きっと、すべてが「動的」だからではないかと思えます。ストレートの院生と現職の院生の学び合い、教員同士の協働的授業展開、学習内容の多面性とその多様な学習形態、そして実習との往還的学び……すべてが「動的」だと感じています。私は主に養護教諭教育、健康教育等の分野で皆さんと共に学んでいきます。養護教諭志望の方や現職の養護教諭の先生方もお待ちしております。よろしくお祈りします。

**教務部副部会長 研究者教員 中妻雅彦**

アクティブラーニングは、生き方を考えるための認識を育てる中等教育・高等教育の授業方法として必要なことだと考えています。生き方を考える認識は、誰かに「教えられて分かる」ことではありません。誰かといっしょに「学びあって分かる」ことによって、主観的な認識から間主観的な認識となります。そのためには、「学びあう仲間」がいなければなりません。仲間なしにはアクティブラーニングは成立しないのです。4月19日に、東京学芸大学教員養成課程の新入生300人に話したことです。弘前大学教職大学院18人の一期生が、「学びあう仲間」として成長することを願っています。

**教務部 研究者教員 三浦智子**

この春よりスタートした教職大学院での日々は、私自身、予想以上に「考えさせられる」機会に溢れていると、あらためて感じます。

私の専門は、教育行政学、教育経営学といった分野の研究になりますが、教育実践の現実に向き合う中で研究の意義や役割を模索しながら、教職大学院における学びの発展に少しでも貢献できればと考えています。“理論と実践の往還”という理念の下、学校現場が抱える様々な課題の背景にある事実の究明や課題の解決方策の追究を目指し、論理的な思考を重ねるトレーニングは、経験に基づく判断にさらなる深みを与えるものと思います。精一杯力を尽くしてまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

**総務部副部会長 研究者教員 吉田美穂**

私は、神奈川県で高校教員として働き、その途中で教育社会学と出会いました。以来この3月まで、それなりに「熱く」実践に携わりつつ、同時に少し「冷めた」目で、自分たちの実践やそれを支える組織文化について研究してきました。学校の教員は熱心であればあるほど、自分の想いや願い、あるいは学校の枠組みに沿って、子どもたちの状況や自らの実践を見てしまいがちです。しかし、時にはそこから離れて、子どもたちの社会的背景や実践が持つ社会的な意味について考えることが必要でしょう。少し「冷めた」目で自らの実践を分析し、学校の外の人たちにも伝えることばで語る、それによって学校と社会を繋ぐ—そんな教員像を思い描いています。

**実習部会 研究者教員 吉原 寛**

4月からお世話になっています。3月まで新潟県の教員をしていました。生徒指導・教育相談に関する授業を担当しています。これまで新潟県以外で生活したことがないので、弘前で生活は不安でもあり、楽しみでもあります。弘前公園の桜、ねぶたまつり、温泉めぐりなど、青森での遊びを満喫したいと思います。また、教育・研究にも積極的に取り組んでいきたいと思っています。研究では、困り感を抱えている子供が少しでも、困り感を軽減できるような支援の方法を考えていきたいと思っています。教育では、子供の気持ちを理解できる地域に根ざした教員の育成を目指していきたいと思っています。“Work hard, play hard.”の精神でいきます。どうぞよろしくお願いいたします。

**実習部会 研究者教員 福島 裕 敏**

学部との兼任教員として教職大学院に関わらせていただいております福島裕敏です。専攻は、教育社会学、教師教育、教育史です。学部と教職大学院とを「繋ぐ (to articulate)」ことが、自分の使命だと思っています。院生の皆さんが、学部段階で培われた「自律的発展力」「協働力」「省察力」を基盤としつつ、あらたに加わった「課題解決力」の向上を図りつつ、他の三つの力をさらに高めていかれることを切に願っております。また「学び続ける教員像」を体現する院生の方々とともに、自分自身も「学び続ける教師教育者」として成長していきたいと思っています。至らぬ点も多々あるかと思いますが、よろしくお願いいたします。

**入試フォローアップ部会 研究者教員 森本 洋介**

教職大学院で勉学を始めた皆様に望むのは「理論的な視点を持つ」ことの大切さに気付いてほしいということです。理論は原則として時代や地域を超えて通じる普遍的一般的なものですが、学校現場は時代や地域によって実情が変わる特殊なものであるため、「理論は現場の役に立たない」というイメージがあるのでしょうか。大切なのは、これら理論や主張の内容をそのまま自分の実践に転用することではなく、それら理論や主張の視点を学び、自分の実践や教師としてのキャリアを振り返る礎にすることだと個人的には思っています。教職大学院の2年間の学びが皆様に刺激を与えるものになるように、お手伝いできればと思います。

**入試フォローアップ副部長 実務家教員 三上 雅 生**

青森県においては、今年度よりスタートした教職大学院で、現職教員院生及び学部卒院生とともに学ぶ機会に恵まれ、幸せに思っていると同時に責任の重さも感じています。現職教員院生の皆さんには、学校でリーダーシップをとれる素地を養っていただくよう学んでいただきたいし、また、学部卒院生の皆さんには、まずは教員採用試験合格、そして教員としてうまくスタートができるよう学修してほしいものです。これから、授業・実習等で院生の皆さんもますます忙しくなりますが、チャレンジ精神を発揮し、前向きに取り組んでいきましょう。

**実習副部長 実務家教員 小寺 弘 幸**

郊外の田圃は、そろそろ田植えが始まろうとしています。昨年、田圃の中に苗が一列に綺麗に植えられておらず、思い思いに植えられたように不揃いの田圃を一枚見かけました。機械で植えられたものではなく手植えのようです。それが私たちの生き方と重なって見えます。「右へ倣え」と言えば、皆そろって一斉に追従する。日常の生活が常にそうである、向上心も充分にはもてないのではないのでしょうか。この田圃の苗のように、一本一本手植えをしながら、たとえ不揃いでも個性豊かに成長を遂げられるよう手助けができたならと思います。昨年見かけた不揃いの田圃は、今年はどうのように植えられているのか見に行くのが楽しみです。

**入試フォローアップ部会 実務家教員 古川 郁 生**

教師の魅力とはいったい何だろう？「児童生徒と一緒にいられる」、「授業をして児童生徒が分かったと喜ぶ顔が見られる」、「保護者や地域とかかわれる」など…様々なと思います。そんな教師の魅力を院生に伝えられたら嬉しいと思います。4月から教職大学院に勤務して、まずは院生の能力の高さと仲間と協力して学修を進めていく姿に驚かされ、この院生ならきっと立派な教師になれると確信しています。2年後の姿が非常に楽しみです。そして今年より立ち上がった教職大学院の先生方のチームワークのすばらしさに驚かされています。みんなが新しい歴史を創るのだと意欲満々です。この教職大学院で勤務できる嬉しさを噛みしめながら、日々努力していきたいと思っています。



教務部会 実務家教員 敦 川 真 樹

私は長年障害のある子どもたちの教育に携わってきました。本県では平成10年度以降から、通常の学級に在籍する子どもたちの中で、特異な行動を示す子どもたちへの対応に苦慮しているという話をよく耳にするようになりました。その多くは一方的にその原因を子どもに帰すことではなく、子どもと家族、そして学校がともに同じ立ち位置で、協力して支援策を考え出すことが状況を改善できる唯一の手立てであるということがわかります。障害のあるなしにかかわらず、日々子どもたちが、共に遊び、充実した時間を過ごせるよう皆さんと共に考えていきたいと思えます。



実習部会 実務家教員 成 田 頼 昭

小学校教諭や弘前市教育委員会指導主事、小学校教頭など28年間の経験を経て、平成29年4月1日付で教職大学院に着任しました。子どもたちの夢や目標の実現のためには、日々の質の高い学びや学校生活・家庭生活が必要です。そのためには、教員相互のチームワーク及び保護者や地域、関係機関との連携・協働を支えにした個々の教員の教師力（強い情熱、実践的指導力、総合的な人間力）が求められます。本教職大学院は、研究者教員と実務家教員がタッグを組み、学部卒院生と現職教員院生が、理論と実践が往還・融合した実践研究を通して教師力が育まれる学び舎です。私自身も含め学び続ける教員として、ともに切磋琢磨し合っていきたいと思えます。

平成30年度 教職大学院進学説明会

各大学の学部卒業予定者（教員免許状取得者または取得見込み者に限る）に下記のとおり教職大学院への進学説明会を開催いたします。当日直接弘前大学までお越しいただき、説明会を受講ください。なお、入試に関することは入試要項をご覧ください。ホームページでも閲覧出来ます。

進学説明会日程

	開催日時	場 所
第1回説明会	平成29年7月26日（水）16：00より	弘前大学教育学部 1階大教室
第2回説明会	平成29年10月25日（水）16：00より	
第3回説明会	平成29年12月6日（水）16：00より	



真剣に話し合う院生



課題に取り組む院生

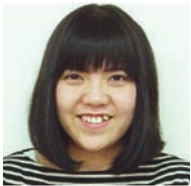
青森県内の各学校の校内研修会や各種団体の研修会等に 教職大学院の教員を派遣します

青森県内の各学校（小学校、中学校、高等学校、特別支援学校等）の校内研や各種団体の研修会等に教職大学院の先生方の派遣が可能です。学習指導や学力向上、生徒指導、安全教育、健康教育等の様々な課題でお悩みの時に教職大学院の教員を活用してみませんか？ 院生の学修も兼ねて担当教員が院生とともに伺います。

* 連絡先 弘前大学大学院教育学研究科（教職大学院）

TEL 0172-39-3412 担当教員 小寺弘幸（メールアドレス h-kodera@hirosaki-u.ac.jp）

院生からのメッセージ



教育実践開発コース

阿蘇 優香

私は、福島大学からこの弘前大学教職大学院に入学しました。他大学から入学したのは私だけだったので初め不安でいっぱいだったことを今も覚えています。

入学してからの毎日は様々な側面から“教育”について考え意見を伝え合う機会が多く、大変である反面、非常に充実した学びを実感しています。同じ志を持った仲間と共に学べる環境、そして教育の先輩方から生の現場の声を聴ける環境は教職大学院だからこその強みであり、毎日が非常に刺激的で充実しています。

将来、この地元青森県で教員として働く時にはこの2年間の学びを活かし、次の世代の子どもたちと共にこれからの青森の教育を創っていきたくと思っています。



教育実践開発コース

神尾 龍太郎

夏が近づいて、春と比べ院生室の様子は大きく変わりました。流し台には金魚の水槽が置かれ、本棚にはおすすめのマンガコーナーが設置されました。しかし、良くも悪くも一番大きく変わったのは教職大学院に対する印象です。院生がこんなに忙しいとも思っていなかったが、こんなに充実しているとも思っていなかった。私は今現職の先生方と院生の仲間たちと共に学ぶことが面白くてしょうがないと感じています。



教育実践開発コース

木村 文香

入学から二ヶ月が経ちましたが、これまで学校現場で活躍されてきたミドルリーダー養成コースの先生方、そして高い向上心を持つ教育実践開発コースの院生との学びの中で、毎日新しい気付きがあり、一日でも早く教壇に立ちたい気持ちが募ります。これは教職大学院で学んでいるからこそです。異なる校種、教科の仲間と共に学べる喜びと、豊富な経験と高い専門性を持つ先生方が指導して下さるという教職大学院ならではのよさを日々実感しています。実習でお世話になる先生方をはじめ、周りへの感謝を忘れず、将来自信を持って教壇に立てるように、この恵まれた環境で多くのことを吸収し、努力していきたいです。



教育実践開発コース

佐藤 洋晟

私が目指す教員像の一つが、生徒の立場に立って物事を考えられる教員です。授業面で考えると生

徒がどのようなことでつまづくのか、どのようなことが得意なのかということを含め授業を構成していきたい。授業の面だけでなく生徒とコミュニケーションをとる時間を増やし、教員から積極的に接することで生徒に目を向けているという姿勢を見せたい。コミュニケーションを増やし教員が持つ時間をできる限り費やすことで、信頼関係を築き生徒の抱えている問題を解決していくことができると考えています。



教育実践開発コース

竹谷 涼

私は、自分が一番関心を寄せている「学級経営」についての研究をこの教職大学院で深めていきたいと思っています。日々の講義で学んでいることや数多くの実習は、教員の立場で学級経営を考えるとときに必要な「生徒との関わり方」、「学習環境の作り方」等を理論的に深めていく際に生きています。

また、理論の妥当性について考え行き詰った時は、同じ院生室にいらっしゃる教員の方々に質問し経験を尋ねています。そうすることで、間接的ではありますが実践経験と理論を照らし合わせることができました。学校現場の生徒と長期的に向き合った経験がない私にとって、教育実践開発コースで学ぶことは強みになると確信しています。



ディスカッションする院生の皆さん



教育実践開発コース

田中 宏輝

入学してから、二か月が経過しました。現場での経験を積んで来られた先生方や知識豊富な仲間に関わり、充実した日々を送っています。学部卒で保健体育専門は私だけだったので、少し不安なところはありました。しかし、毎日のディスカッションを通して、今まで自分にはなかった見方や教科の枠を越えた新しい考え方と出会うことができている。これからの私の課題は、深めた学びを実践に結び付けていくことです。楽しみながら成長していきます。



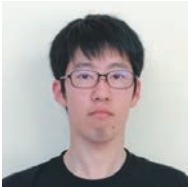
教育実践開発コース

斗澤 晴加

教職大学院に入学して二ヶ月、あっという間でしたがとても濃厚な二ヶ月でした。入学当初は院生室にいることにとっても緊張していましたが、明るく楽しい仲間のおかげで、今では自分にとって院生室はとても落ち着く場所になりました。

授業は学部時代よりも発展的についていくのに必死ですが、現職の先生方と一緒に学ぶことで、より実践的な視点で考えることができるようになりました。

5月の末からはフィールド実習が始まります。この二ヶ月で学んだことを生かし、より教師としての資質を高めていくことができるように努力していきたいです。



教育実践開発コース

新山 裕大

この文章を書いている5月に差し掛かり、あっという間の一ヶ月が過ぎようとしているところです。率直な心境を語るのなら、もう一ヶ月過ぎたのか、というところでしょうか。日々提出物に追われていて忙しいのは事実ですが、張り合いがあり、とても充実しています。私は高校数学を志望していますが、第一に数学は楽しいということを伝えたい。数学自体難しく敬遠されがちかもしれませんが、答えはあるのです。その解を導くための過程・道筋は複数あるのです。その複数ある過程・道筋を考えるのが私は楽しいのです。押しつけはよろしくないで、あくまで「伝えたい」。そんな教師になれるよう精進していきたいです。



教育実践開発コース

八柳 匡

私は人文学部の現代社会課程法学コースに四年間在学しながら教職課程を取り、そこで「教員になるにはもう少しきちんと勉強しないとイケないな」と思い、この教職大学院に進学しました。

入学当初は知識・経験の双方で教育学部出身の人たちや現職の先生との差を感じ、やっつけかどうか不安でしたが最近ではむしろ「伸びしろがある」と思うようになりました。

「どんな先生になりたいか／目指すべきか」ということを考えることが多いですが、他の先生に比べて法学・政治学をそこそこ本気でやった専門的な経験は武器になるような気がしています。たまに言われる「その発想はなかった」という誉め言葉を糧に今日も頑張ります。



教育実践開発コース

三上 悟

教職大学院に入学して早くも二ヶ月が経ちました。

受験した当初は、採用試験に落ちた以上、大学院にも落ちたら、それこそ行き場がない！ という非常に張り詰めた気持ちで勉強していましたし、入学が決まった後も、ほとんどマンツーマンで先生が学生に対応することや、これまでとは年齢層・教科が全く違う仲間と学ぶということを知り、非常に緊張していました。しかし、今は皆さんとも打ち解け、リラックスした状態で日々の勉強や実習に打ち込めています。

先生たちに企画していただいた4月半ばの歓迎会や、ストレートマスター・ミドルの学生で自主的に行った4月末のお花見がよい感じに働いているようです。



ミドルリーダー養成コース

赤垣 由希子

(野辺地町立野辺地小学校)

私はある先生に出会ったことで、教師になり、あの先生のような存在になりたいと思いました。学級も友達も自分も変わったと思えたからです。あの先生を目指して自分なりに努力し、今もう一度学んでいるところです。また、私が頑張る姿を見せることで、出会った子どもたちに何か伝えられればいいなと思っています。

経験を積みいろいろなことが見えるようになってきたつもりでいたところでしたが、つい最近、「感動」する授業に出会いました。感動する授業の秘密をさぐり、1年後、子どもたちの前に立ちたいです。



ミドルリーダー養成コース

大里 智子

(県立青森西高校)

教員生活を重ねる中で、自分の能力不足をどうにかしたいと考え、3月まで高校3年生の担任をしていましたが、彼らの卒業と次の進路への出発というタイミングで、教職大学院へ入学させていただきました。入学からの二ヶ月弱で、授業や実習、その中での考察・議論を経験し、教授してくださる先生方、さらに他の院生からも多くを学ばせてもらっています。この間、以前にも増して自分の能力・意識の低さ、考えの狭さ、技量の無さを痛感し、落ち込む毎日ですが、この機会をいただけたことに感謝し、生徒が意欲を持って学ぶ場をコーディネートする力を身につけた教師を目指し、前進していきたいと思っています。



ミドルリーダー養成コース
工藤 恵代
(つがる市立木造中学校)

この弘前大学教職大学院で毎日他の7人の現職教員をはじめ、ストレートの院生からの刺激を受けながら研修をさせていただいています。講義では演習やグループ協議、また、弘前大学附属学校や連携協力校での実習では、学校観察や省察検討等の協働的な学びが展開されています。

予想以上の忙しさに困惑しておりますが、反面、講義から学ぶ理論と今までの実践が結びつく瞬間も体験させていただいています。所属校にはご迷惑をおかけしておりますが、研修したことを還元できるよう、これからも積極的に学び続けていきたいと思っています。



ミドルリーダー養成コース
小泉 朋子
(県立八戸第二養護学校)

教職大学院では、初めは、高度な講義内容と情報量の多さ、そして提出物の多さに、「大変なところに来てしまったなあ。ついていけるのだろうか…」と不安にもなりましたが、良い仲間恵まれ、毎日充実した日々を過ごすことができます。私は特別支援学校の教員ですが、小学校、中学校、高等学校という他校種の先生方の、私とは違った視点からの考え方はとても新鮮で、学ぶべきことがたくさんあります。また、ストレートマスターの皆さんの教育に真っ直ぐに向き合う真摯な姿にも、大変大きな刺激を受けています。

教職大学院の2年間、実りあるものにできるよう、精一杯頑張っていきたいと思っています。



ミドルリーダー養成コース
長谷川 泰樹
(三戸町立斗川小学校)

教職大学院での生活がスタートして、あっという間に二ヶ月以上が過ぎました。最初は右も左も分からず、日々の授業と課題をこなすのに精一杯でした。でも、様々な校種の現職の先生方やこれから教職を志すストレートマスターの皆さんと共に学ぶ中で、多様な考えに触れ、自分の未熟さを痛感しつつも教職大学院教員の先生方の深く考えさせられる授業を受けることで、とても充実した毎日を過ごすことができます。毎日の授業に実習、課題に加え、研究テーマを模索している最中で大変に思うこともありますが、この教職大学院で学ぶ2年間を通して、現場に戻った時に学校や地域、子どもたちに返すことができるようにがんばりたいと思っています。



ミドルリーダー養成コース
外川 知絵
(県立北斗高校)

いくつかの学校で勤務する中、自分の未熟さをどうにかしたいと考え、教職大学院を受験しました。今年1年は院生として勉強に専念できるため、教授の方々や仲間との学び合いを楽しみにしていましたが、やはりそこは教職に特化した大学院。高度で専門的な講義内容に圧倒され、毎日のスケジュールをこなすだけで精一杯！仲間たちに置いていかれないよう、必死に食らいついています。課題をひとつずつこなしながら、自分の中にある問題意識とじっくり向き合う時間も作っていきたくです。



ミドルリーダー養成コース
中田 泰人
(青森市立造道中学校)

尊敬する先輩方に多くのことを教えて頂いた講師時や初任時での職場、そうした学びを実践する場として、現在の勤務校で8年間、教育活動に当たってきました。先輩を真似ることや自分で得た経験、仲間の助言を生かし、目の前にことに最善を尽くして臨んできたつもりです。そして今、40歳を迎える前に、「学校のために」という広い視野で考えたとき、自分が何をすべきか、何が足りないのかを見つけないかと考えました。ここで学ぶことは、今後の自分の教師人生だけでなく、より多くの「未来」につながるのだという思いで、学んでいきたいと思っています。



ミドルリーダー養成コース
坂本 寛実
(田舎館村立田舎館中学校)

ここに来るまで、今までの自分の取り組みや学校の教育課程にあまり疑問を持たずに過ごしてきました。しかし、客観的に見るともっとこうすべきではというものがたくさん見えてきました。

特に、総合的な学習の時間は各学年に任せられており、3年間学校全体でこんな力を段階的に伸ばしていこうと共通認識がないこと、授業では丁寧でわかりやすいものを心掛けていましたが、教えるすぎるのは子どもたちの考える力を妨げているということは見直していかなければならないと感じています。

今後たくさんのお話をインプットし、それをアウトプットできるようにしていきたいと思っています。

〈編集・発行〉

弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻

(教職大学院) News Letter 創刊号 2017.6.9発行

〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地

Tel 0172-36-2111 (代表)

メールアドレス k-daigaku01@hirosaki-u.ac.jp

ホームページ <http://www.hirosaki-u.ac.jp>

弘前大学教職大学院 入試フォローアップ部会